



白 門 板 橋

2002. 3. 15 VOL.17

編集
発行

中央大学学員会 東京板橋区支部
〒175-0082 板橋区高島平2-23-3-101 TEL 03-3550-3300



■「新春の集い」あいさつ要旨— 順風の支部活動に感謝の念

支部長 小日向 孝介



会員の皆様、明けましておめでとございます。

皆様には、日頃支部活動に多大のご協力をいただき、また本日もこのように多数のご出席をいただき、厚くお礼申し上げます。

二十一世紀を迎え、世界は大きく変わりつつあります。このうねりの中で、昨年は国の内外で大きな事件や出来事がありました。しかし、いかなる場合も私たちは、常に平和と安全な生活を求めて参りたいと思います。

変革の時代にあつて、先の内閣改造で学員から副大臣、政務官各一名が就任して、行・財政改革に、また認証官たる検事長四名（東京・名古屋・福岡・高松）が任命され、法と正義の実現と母校の名譽のためにも大きな期待を寄せたいところで。

正月恒例の箱根大学駅伝で今年も上位入賞を果たし、連続十六年五位以内の成績を残した後輩には拍手を送りたいと思います。司法試験は、昨年より合格者数を減らしましたが、次年度に望みを託したいと思います。

ここで板橋支部の一年を振り返りますと、昨春秋に都区内支部の連絡会を板橋支部の当番で開催し、他支部との情報交換と相互交流を図ることができました。春の観校会、秋の旅行会に加え同好会活動も活発に行われ、会員同士の親睦も大いに深まり、概ね事業計画通り遂行できたように思います。

今期総会では、役員改選と共に母校百二十五周年記念事業プロジェクト実現のための募金運動への協力等を共々ご審議いただきます。ご接拶に代えさせていただきます。

支部ニュース

「新春の集い」盛大に祝う

平成十四年度の「新春の集い」が去る一月十八日(金)の午後六時から区立文化会館大会議室で開かれ、八十名の会員が出席して盛会に終わりました。



恒例の校歌を斉唱する会員

れ、高橋氏の受賞のことばの後、牧相談役の発声で乾杯。

歓迎の途中、遅れて参加された小野田元氏(顧問)に東北学院大から工学博士号を贈られた栄誉に記念品の贈呈と同氏の喜びの報告をいただいた。

新年に相応しく慶事が続いた後に、紅一点で初参加の荏苒歩さんから自己紹介があり、場内から盛大な拍手が送られました。

■ 懇談は楽し

懇親会は今年も立食形式。テーブルの表示に関係なく、どのテーブルにも懇談の輪が広がり、話題は尽きない。

宴半ば、新年会をかけもちして多忙な石塚顧問(区長)が駆けつけて、元氣な挨拶をいただいた。終宴近く、各同好会の幹事から活動状況の報告と入会の呼びかけがあったから、観校会の当番・坂下ブロック長から日程の案内と多数参加の呼びかけの後、恒例の校歌・応援歌・惜別の歌の三点セットを全員で肩を組んで合唱し、散会しました。

(池田記)

支部運営のノウハウ交換

都区内支部連絡会

学員会の東京都区内支部連絡会が、板橋区支部の当番で昨年十月二十七日夕、板橋区立文化会館で開かれました。

都区内から十三支部と支部創設準備中の三支部の役員に、当支部からの役員を含めた総勢七十六名が情報交換と交流を深めました。

■ 囲碁部が連続入賞者を出す

〇〇〇

白駒囲碁大会が昨年十一月一日(土)、学員約二二〇名が参加して駿河台記念館 階の大会議室で行われ、板橋区支部からは二〇名が出席し、入賞者を出すなど大いに健闘した。

入賞者は、次の通りでした。

(敬称略)

▽級位者ブロック
優 勝 (四戦全勝) 石塚 允信
準優勝 (三戦一敗) 川上 久雄

(囲碁部・水野)

観校会の日程等決まる

♪♪♪

支部恒例の行事となった観校会の日程等が、次のとおり決定しましたのでお知らせします。

記

日時 四月六日(土) 正午
場所 区立城北公園
板橋区坂下二ノ一九

* 詳細は同封の案内書を参照して下さい。

集合場所 現地
都営地下鉄・蓮根駅下車

徒歩五分

参加費 四、〇〇〇円

世話役(当番・坂下ブロック) 大森 外三名

雨天 「よし邑」で会食

申込み 三月二十五日(月)

同封の「申込み書」で

内田宛郵便又はFAX。

■ 年会費納入のお願い

平成十三年度の年会費が未納の方は、納入下さるようお願い致します。
(久米)

母校のニュース

司法試験合格者

百名の舞台を割る

平成十二年度の司法試験合格者が発表され、前年の一〇二名から二六名減の七六名に終わった。また公認会計士試験でも一名減の五九名で、東大に抜かれ四位となった。

一層の奮起を期待したいものである。

◆市ヶ谷キャンパスに◆ アカウンティグスクール開校

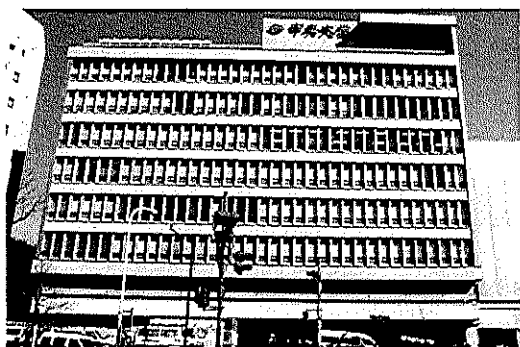
母校・中央大学では、現在、社会人対象の 大学院教育を実施しているが、今年四月から新たにアカウンティグスクール（専門大学院国際会計研究科）を開校する運びとなった。また懸案のロースクール（法科大学院）は、平成十六年四月開校が予定されている。

箱根駅伝健闘す七四位

□

第七八回・東京箱根間往復大学駅伝競争で、母校・中央大学は健闘空しく四位に終わった。

昨年の往路優勝の実績から上位入賞が期待されていたが、四年生が一人の下級年次生主体のチーム編成で、経験不足がたたり前年の順位を一つ下げ、四位となった。かつての黄金時代を知る先輩から見れば、決して満足できる成績ではないが、常に五位以内の成績をキープしている後輩たちの健闘を称えたい。



写真は、母校の市ヶ谷校舎

□□□□□

母校百二十五周年記念事業がスタート

□□□□□□□

母校・中央大学では、平成二十二年の創立百二十五周年に向け、新三種の建設他各種事業が計画されているが、計画達成のための募金運動がスタートした。

支部会員の皆さんには、すでに趣意書が届いていることと思いますが、広く会員の皆さんにもご理解をいただいで、母校発展の一助に賛助をお願いしたいと思います。

成田選手が

尾車部屋に入門



今年度の学生
横綱・成田 旭
君（法卒予定）
は、将来への期待から去就が注目されていたが、尾車部屋に入門が決まり、三月場所から幕下十五枚目付け出しでデビューすることになった。突き押しが得意。

（栗原記）

訃報

謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

▼田中 邦明

・昭和三年法卒部卒

・板橋区板橋一ノ四六ノ一〇

・平成十三年一月四日逝去

・株式会社東京管岡林業子舗社長

▼白谷 大吉

・昭和四〇年法卒部卒

・板橋区中丸町五五ノ六ノ四〇

・平成十四年一月十八日逝去

・弁護士

▼秋元 平馬

・昭和十九年法卒部卒

・板橋区高島平五ノ一七ノ一五

・平成十四年一月四日逝去

・税理士

・支部相談役（元副支部長）

（事務局）

支部ニュース(二)

高橋勝徳氏藍綬褒章を受賞

□□□



支部会員の高橋勝徳氏が昨年秋の叙勲で、藍綬褒章を受賞された。

これは、弁護士のかたわら永年にわたり調停委員の仕事に功労があり受賞されたもので、おめでたいことです。

小野 元氏博士号を贈る

□□□



支部顧問の小野元氏が昨年秋に東北学院大学から工学博士号が贈られた。

論文は、「直流ホロー陰極放電の電極構造に関する研究」

同氏は先に中央大学から商学博士の学位を贈られているので、二つ目の学位となる。生涯学習を垂範され、おめでたいことです。

支部会員の有志が訪台

*

去る二月十日(日)から三泊四日の日程で、板橋区支部の小日向孝介支部長他七名の有志が、旧正月の台湾を訪れ、花蓮と台北の観光と故宮博物院に代表される中華民国の文化とアミ族の異文化にも触れて楽しい旅をした。

旅の目玉は何といつても、故宮博物院の見学で、中国歴代王朝の国宝七十万点を収集した世界四大博物館のひとつに数えられるだけに、展示品は立派なものばかり。



写真は、台北の忠烈祠を背にする一行

入場者はわずかパーセントの七〇〇〇点の展示品すら駆け足で見て二時間。入れ替えを待って全収集品を見ることは不可能と知り一回囁然とする。

台湾という小さな国に、中国四千年の歴史を垣間見た旅だったが、旧正月の元旦に名刹・龍山寺に初詣として商売繁盛を祈願したことも付記する。(池田記)

パソコン同好会の手で

「支部会員名簿」を作成

パソコン同好会は、今年度も志村坂上の「ITサロン」を会場に昨年十一月から開講し、卒業作品に「支部会員名簿」のメンテを行ない、会報の発送に合わせて全会員に送付しました。

二年目を迎えた受講生は、ワープロをマスターして、インターネットで各種のデータ検索もほぼマスター。データベースで卒業作品を手がけるまでになり、相互研鑽に励みながら、大いに親睦も図りました。(二宅記)

歳時記

▼：昨年から今年にかけて忌まわしい事件がメジロ押しに続いた。その中で最も腹の立ったのは、雪印食品の偽装食肉事件だ。親会社の起こした牛乳中毒事件がまだほとんどほりか冷めない内に、組織ぐるみで犯した犯罪は、赦せるものではない。

業界の王者も一皮むけば、凶悪な犯罪集団でしかなかったのが残念だ。

▼：囲碁に使う白石に等級があり、最上級の石を「雪印」という。雪の様に美しく上質のもので、値段も高い。経営再建を断念した雪印食品はむしろ、親会社の雪印乳業まで白石を放棄して、黒石ささ持てるかどうか？ 気の毒なのは社員だ…。



■秋の旅行記

史跡と秋の母畑温泉を訪ねる

リポーター・大野正浩

*

■常陸から陸奥へ

秋晴れに恵まれた十一月十七日(土)、いまや恒例となった石塚板橋区長(顧問)に見送られ総勢三十一名の乗り込んだバスは、一泊の旅へ区立産文ホール前を出発した。

常磐自動車道をまっしぐらに走り抜け、正午前には北茨城ICに到着した。早目の昼食をすませ、

最初の見学は勿来の関。奥州三古関の一つで、古くは万葉集に小野小町、紀貫之、西行法師らが歌を詠んだ地と言われるが、いま関所の面影はなく、苔むした歌碑を追って古の歌人に思いを寄せざるばかりだった。勿来の関・文学歴史館では係員の説明で欠落していた歴史事情を学び、バスは磐越自動車道から国道四九号線に入り、北上するごとに、紅葉が美しい。千五沢ダムから流れる溪流沿いに紅葉した山並みは、車窓を額縁に仕立

てた絵はがきの様で美しい。

秋の日没は早い。鄙びた石川町を抜けて、八幡太郎義家の愛馬の傷を癒したという霊泉の上に立つ宿・母畑温泉「八幡屋」にチェック・イン。

大きな旅館である。篝火を焚く露天風呂は、風情があつていい。巨石をくりぬいた風呂では、岩の肌触りと湯の肌触りを堪能した。築十年余りの建物は清潔感が溢れ料理も良し。宴会場での女将の挨拶にひときわ力が入っていたのは、宿の社長が白門OBのせいだったかも知れないが、誰もが認め

る美人女将。宴会は当然のように盛り上がり、惜別の歌を斉唱して中締め……。

二次会は一室に十数名が集まりコップ酒を傾けながら、最近では聞かなくなった「大学数え歌」「学生首頭」など卑猥な替え歌も飛び出し、バンカラストाइルで盛り上がり、古き良き時代を懐かしみ幾度となく盃を交わした。

■歴史の香りが充満

盛大な見送りを受けて、宿を出発。二百目の観光の目玉は、白河の関跡と白河城。

白河の関は六世紀頃の創設で、蝦夷の南下を防いだ砦。関跡は碑石がなければ、誰も気づかない寂しい所。

JR白河駅の西側に小峰カ岡と呼ばれる丘陵に聳える白河城は、実に姿が美しい。南北朝期の武将・結城親朝が築城したのが城郭の始まりというから歴史は古い。名物の白河・蕎麦。で昼食後、帰途に着く。陸奥の国に史跡を訪ねて先人の足跡を偲ぶ旅は、まさに温故知新の楽しい旅でもあった。

(大野正浩記)



白河城を背に気分は青空

□□□□□

告知板

▼定時総会

平成十四年・支部定時総会の日程などが、次の通り決定しましたので、お知らせいたします。

記

日時/六月二日(土)

午後五時三〇分受

付開始、六時

会場/区立文化会館

大会議室

新入員の紹介

どうぞよろしく

お願い申し上げます

■■■

▽荏苒 歩 昭和五五年文

・板橋区下板橋

二ノ八ノ二ノ五〇五

・旬オフィス二ワ取締役

・趣味/読書・書店巡り



志茂田文学拾い読み



「黄色い牙」

著者／志茂田景樹

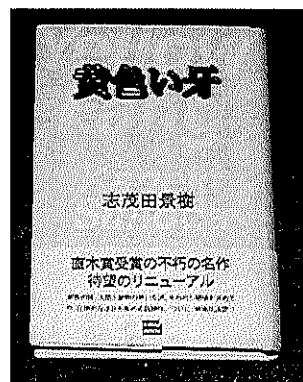
発行所／KIBABOOK

女装まがいのファッションで、テレビや雑誌にも臆せず出演してホモまがいのシャベリには、学員ならずとも食傷気味になる。

質実剛健・家族的情味を校風とする白門出身の作家としては、およそ似つかわしくないもので、これまで彼の作品は一冊たりとも読んだ事がなかった。

学員作家シリーズを連載してきた手前、古書店で「危険な調書」「華統と報復」「魔界の裁き」の三冊を買って読んで見ると、これが実に面白い。文学の香りは乏しいが、「危険な調書」はシドニー・シェルダン風のタッチである。十分な動機づけを経て手にしたのが「黄色い牙」で、一九八〇年に受賞した直木賞作品である。

*



〔中略〕

ふと、背後でがさがさと笹むらぐ揺れる音がしたようであった。伐採人夫が上の方にあがって下見かなにかしていて、降りて来たのかと思ひ、継憲はのんびりと振り返った。

大きな熊が、目の前二メートルほどのところの笹むらに腰を低めて飛びかかってくるころであった。息が止まるような恐怖のなかで五十貫はあるべいな、と熊を見つけたときのくせで見積もり、とつさに銃を構える余裕はあった。しかし、それが精一杯で、引き金を引くか引かないうちに、ぐわー

*

と牙をむいて襲いかかってきた熊に、継憲は左頬と鼻を爪でかきむしられ、鉄砲を吹っ飛ばされた。鉄砲は銃声を発して、十メートルも遠くへ飛んだ。〔中略〕

*

軍縮で兵役を除隊になった主人公・継憲が、マタギ(猟師)を生業とする父・継二郎からシカリ(猟師の組頭)を実力で継承し、東北の厳しい自然環境の中で、神がかりなマタギの掟を破る者には情け容赦なく罰する非情に徹し、遭難した仲間には危険を顧みず果敢に救助する俠気を見せ、恋女房のさとと子供たちには気配りと思ひやりが深い。

硬軟合わせもつ継憲は、年長のマタギを含めた荒くれ男たちを見事に統率し、マタギの伝統を守りながら生業に励む様を現代社会に置き換えた時、人は誰しも時代に迎合し、権力にへつらう風潮があるだけに読む人に感銘を与えずにはおかない。かたくなに己の分を貫いた男の一生を描いた作品で、ほんのりと文学の香りも残る作品である。

(平山記)

大相撲一月場所——
中大出身力士の星取表

玉春日関

ベテラン健闘し勝ち越す！

*

- ▽出島(武蔵川) 本名・出島武春 平8卒
- 西前頭4枚目 六勝九敗
- ▽玉春日(片男波) 本名・松本良一 平6卒
- 東前頭9枚目 八勝七敗



玉春日関

- ▽若孜(松ヶ根) 本名・中尾浩規 平7卒
- 幕下西3枚目 三勝四敗
- ▽田中(友綱) 本名・田中康弘 平10卒
- 幕下東22枚目 五勝一敗

*

○一月場所は玉春日、田中が勝ち越したものの、出島と若孜は苦しい場所に終わった。

(池田記)

■小茂根は合成地名

小茂根は、昭和四十年五月一日の住居表示変更により、旧小山町・茂呂町・根の上町の頭文字をとってできた合成地名である。

この地域は遺跡の宝庫で、旧町

地名の由来…⑨

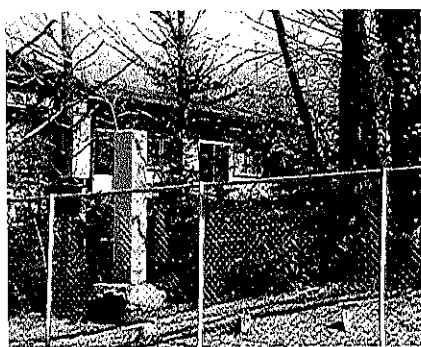
「小茂根」の巻

名の各地区に遺跡がある。しかも旧石器時代から縄文時代、弥生時代と各時代の石器や土器が発見される。

小山遺跡は板橋区の南西に位置し、地形的には武蔵野台地の東北

部にあたり、石神井川の南に面した標高二四メートル前後の台地上に立地している。また、環状七号線により分断されており、後述の根の上遺跡と隣接している。

茂呂遺跡は昭和二十六年、通称「オセド山」と呼ばれる丘の脇を通りかかった中学生が、丘の断面で石器を発見したことがきっかけ



写真は、「茂呂遺跡」の雑木林

となり、発掘が始まった。

すると、関東ローム層より「茂呂形ナイフ形石器」と命名されるようになる。黒曜石の石器が発見され、南関東に旧石器文化が存在したことを明らかにした遺跡として学史的にも有名である。

根の上遺跡は昭和十二年、大友魁氏により黒曜石等が採集される

など、遺跡の存在は古くから知られていた。その後昭和二十九年に芹沢長介氏が、「関東及び中部地方における無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」を発表した。この中で、細石器文化の存在を予想し、これ以後一躍有名になった。

■地名の由来を検証

また旧町名の中で、茂呂町という地名の由来には、諸説がある。

茂呂は毛呂(モロ)、両(モロ)、諸(モロ)の漢字を当てるところもある。このモロの起源をムラからの転化とする説がある。しかし、古い朝鮮語で「山」をモリといい、北方大陸系の人々の信仰の神は天上から山や木に降下するという思想、日本語でも木の茂った小山のようなどころをモリ(森)といい、古代神の降りてくる聖地をモロ、モリと言っていたことなどを考え、板橋区の茂呂は古い時代、大陸から渡ってきた人たちの子孫が、「オセド山」に聖なるものを感じてつけた地名かも知れない。(参考文献/黒部溪三著「板橋ものがたり」中三川記)



編集後記

●：ソルトレイクシティ冬季五輪が閉幕し、メダルはわずか二個に終わった。文武両道を誇った母校にも、明るいパンチのきいたニュースが乏しい。メダルは取れなくても、社会に出て役立つ人間に自分を磨いてもらいたい。「白門」には、清廉潔白の意味も込められているのだから。●：顧問の小野田元氏が母校からの商学博士の学位に続いて、東北学院大学から工学博士の学位を取得した。高齢にもかかわらず向学心の旺盛な姿勢には頭が下がる。まさに生涯学習を表証された。●：生涯学習を自己研鑽に置き換えてみると、「読書」に尽きると思われる。大学に進まなかった作家の浅田次郎の読書量はすごい。そして勉強家である。次々にベストセラーを世に出し現在の地位を築いたが、読書している時が「至福の時」だとか……。時間に余裕ができて、時間を大事にしたい。(平山記)